修士（2021 年度）

日本留学における<困難と対処>をめぐる社会学的研究
――中国人学生の留学経路を中心に着目――

邵　葛（ショウ　カツ）

1. 研究目的

本研究は在日外国人私費留学生を考察することによって、彼（彼女）たちがどんなニーズを持ち、そしていかに日本留学で直面する様々な問題と向き合っているかと、留学生内部の多様性や階層化を追究することを目的としている。

2．先行研究の要約

留学生研究に関連する文献に対するレビューから、欧米の研究者は長い間留学生に注意を向けており、大量な研究成果を蓄積していることがわかる。留学生に対する認識が、初期の「トランスカルチャーへの消極的な遭遇者」という認識から、「変化と問題解決への積極的な対応者」という認識へと変化した。ますます多くの研究がその「学習者」ステータスに注意を向け始めているのだ。視点の多様化と留学生の理解の漸進的な充実に加えて、留学生に関連する研究方法も注目に値する。留学生に関する研究は基本的に実証研究であり、定量的研究と定性的研究の手法を用いた文献が多く見られた。

日本留学に関する先行研究の分析から、次のような事項が明らかになった。

(1) アジアの多くの国において、米国が最も人気の高い留学先であり、日本は、英国等と並んで 2 番目に人気があるグループに位置すると考えられる。
(2) 中国、韓国、台湾の場合には、同じ漢字文化圏であることが日本留学の促進要因であるのに対し、非漢字圏のアジア諸国の場合には奨学金が日本留学の強い動機となっている者が多い。
(3) 教育の仕方や内容に関する評価は、欧米が高く、日本が低い傾向がある。
(4) 留学生の多くが「日本人は親切で協力的」と捉えているが、より深い交流を求めると閉鎖性にぶつかる者も少なからずいる。
(5) 在日留学生による日本留学の評価については、研究によりその捉え方は異なるが、元日本留学生は、在日留学生よりも、留学経験を肯定的に捉える者が多い。
(6) アジアの多くの国においては、米国の学位が日本の学位より高く評価される傾向がある。
(7) 日本での就職を希望する者が増加している。

3．量的調査、質的調査から得られた結果

本研究では、今現在の留学生の日本留学の理由や実際に遭遇する問題と、どのようなサポートを受けているかどうかという問題について、大学、大学院や専門学校に在籍していた留学生を事例として取り上げ、留学生の日本における様々な問題を、量的調査の「私費留学生の実態調査」および質的なインタビュー調査から得られたデータをもとに分析した。

以下、明らかにした結果をもとに考察を述べたい。

第1に、留学生の日本に留学しようとするきっかけ、理由については、先行研究の検討でも触れたように、多くの留学生が地理的な近さや、言語文字が似ていることや、アルバイトができ、経済的な負担が少ないなどを日本留学の理由として語っていた。しかし、今回の量的調査の「私費留学生の実態調査」では、留学生の日本留学理由が「a 日本社会に興味があり、日本で生活したかったため」がもっとも当てはまる理由になっている。これは留学生たちが日本の文化的なソフト面に対して大きな興味を示しているとわかる。また、質的なインタビュー調査でも多くの留学生が語っていた日本のサブカルチャー、ACG（アニメ、コミック、ゲーム）やアイドルが世界中若者文化の中で広く浸透していることが、留学生が日本を留学先として選んだ大きな理由の1つになっていることが明らかになった。

第2に、問い「留学生の出身地域が日本留学にどのように影響するか」に対して、「日本と経済的な格差が大きい地域ほど、より日本を魅力的な留学先として考える」、「日本と文化及び言語感覚が近い地域であるほど、日本留学にあたって日本語の学習に苦労が少ない傾向がある」の両仮説は量的調査「私費留学生の実態調査」での有意性が見られなかった。日本留学にあたり、「日本を魅力的な留学先として思うかどうか」、「日本語の学習に苦労したと思うかどうか」は、「留学生の出身地域が日本と経済的な格差の大きさおよび文化及と言語感覚の近さ」などの外部要因の影響力よりも、留学生自身が日本文化を好きかどうかなどの内部要因のほうが大きいと考えられる。

第3に、問い「奨学金をもらうことで、留学生のアルバイト時間を減らせるか」に対して、今回の量的調査で留学生の日本におけるアルバイトの理由は主に「日本での生活を維持するために必要だから」であることがわかり、この理由が当てはまるほど、アルバイトの時間が長い傾向があることも明らかになった。アルバイトができることは、富裕層でなくても留学が可能になる上で、重要な役割を果たしていることがわかる。しかし、アルバイトの時間が長くなると、必然的に学習時間が圧迫される。一方で、留学生がもらう奨学金の金額が高いほど、週間アルバイト時間が短い傾向があることも明らかにした。日本留学の環境を改善するためには、奨学金が大きく貢献できるといえよう。

第4に、今回の量的および質的調査から、留学生全体の両親の最終学歴はかなりの高学歴であることが明らかになった。しかし、質的調査では専門学校進学者の両親の学歴が大学と大学院進学者の両親の学歴と比べると低い傾向が見られた。日本留学はアルバイトができ、出身階層が高くなくても留学が可能になった。しかし、長時間アルバイトおよび塾の受講料を支払う余裕がないため、もともと大学に進学しようと考えていたが、それが叶わず仕方なく専門学校に進学する比較的に低い階層の留学生たちの様子が見られた。このように留学生本人が対処しにくい出身階層の差が、進学先への差として表れている。